

聖霊降臨後第2主日(特定8)説教 2011/6/26  
聖マタイ福音書第10章34節～42節  
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

福音書が伝えるイエスさまのみ言葉は、マタイ福音書であれば、特に山上の説教の中に記されているみ言葉の中には、わたしたちの心の中に素直に入ってきて、心を和ませ、深く慰めを与え、またわたしたちを勇気づけてくれるものが少なくないと思います。そのようなみ言葉を自分の愛唱聖句として、普段から口ずさみながら信仰生活を送るよすがとしておられる方もあるでしょう。

ところが、今日の福音書の冒頭にありますみ言葉は、わたしたちに戸惑いを起こさせるのではないのでしょうか。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」このみ言葉を読む時に、どのように理解したら良いのか、イエスさまは何を仰ろうとしておられるのか、疑問を感じることなくして済ませることはできません。

わたしたちが心の中に描くイエスさまという方は、戦争や争いを好む方ではなくて、平和の主であられるはずです。イエスさまの誕生を羊飼いたちに告げ知らせた天使たちは、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」(ルカ2:14)と賛美の歌を歌いました。ここには、救い主の誕生は、地に平和をもたらす出来事だという宣言が、高らかになされています。

預言者イザヤの言葉にも、救い主として生まれてくるみどりごの名は「『驚くべき指導者、力ある神 永遠の父、平和の君』と唱えられる」(イザヤ9:5)と預言されています。その平和の君の到来を人々がどれだけ切望していたことでしょうか。そして待ちに待った平和の君の誕生を、飼葉桶の幼子の中に見て喜びに溢れたのです。

福音書が告げる平和というのは、力による支配ではなくて、人間が皆、兄弟姉妹として仲良く生きる時に実現するのだ、支配と搾取という関係ではなくて、愛と正義が行われるところにこそ平和があるのだ、とわたしたちは理解し納得もするのです。

わたしたちが「主の平和」と礼拝の中で挨拶を交わすのは、仮にお隣の人と何かのわだかまりがあったとしても、イエスさまのもとにあっては、それを乗り越えて和解と一致への歩みを踏み出すことが可能とされると信じるからです。「隔ての壁を取り壊し」(エフェソ2:14)、相対立するものを一つに結びつけて、平和を実現して下さったのが、イエスさまの

十字架であると信じるからです。そして、その平和の支配のもとに、今、置かれていることを信じるからです。

それが、「地上に平和でなく剣をもたらすために来たのだ」とか、家族同士を「敵対させるため来た」というみ言葉を聞くのであれば、「え、そうなんですか」とイエスさまに聞き返したい、「その真意はどこにあるのですか」と確かめたい気持ちに駆られます。

そればかりではなく、もしかしたらイエスさまに対するイメージを自分勝手に作り上げていたのではないか、自分に都合の良いところだけを取り上げて、救い主の姿として思い描いていたのではないかと振り返らざるを得ないのです。自分はキリスト教に対して誤解をしていたのではないか、もう一度初めから信仰を見直さなければならないのではないか、という思いにすら捕らわれます。

わたしたちは、家族が仲良くして毎日の生活を送ることができるというのは、どんなに素晴らしいことかと思えます。家族の助け合い、支え合いがあるから、様々な問題を乗り越えて、今日までやってこれたのだとつくづく思えます。

家族が仲が悪くて、いつも悪口を言い合ったり、喧嘩が絶えないような家庭であったなら、そんなところには帰りたくありません。帰っても憩いや安らぎを得ることは出来ません。或いは、思ったことを自由に口にするのでできない雰囲気の家であったら、自分の居場所を見出すことは難しいことでしょう。家にいることが、外にいる以上に何時も緊張していなければならないのだとしたら、むしろ一層、一人でいる方が、精神衛生上、どんなに良いか分かりません。家庭生活が、わたしたちの毎日の営みに与えている影響は、極めて大きなものがあると思えます。

いろいろと問題を抱えている家庭を批評するつもりで言っている訳ではありません。わたし自身の体験を思い起こしているのです。わたしの父の家は信仰を持って、その使命に生きる家でありました。祖父と祖母の時代から、社会の底辺にある人々への伝道を志し、「証しと奉仕」をモットーに、キリスト教の社会福祉の働きに生きてきました。

だからその使命を遂行することが何よりも優先されました。同じ使命に生きるか否か、そのことが家族の一人ひとりに問われました。そのため、道理を弁える年頃から、子どもたちは、いつまた使命感の話になるか、常に緊張感をもって家庭生活を送ってきた記憶が強く残っています。家庭の団らんがなかったわけではありません。暖かな家族の交わりを楽しむ機会も豊かにあったと思えます。

しかし、それ以上に、家族が力を合わせて与えられた使命を遂行するために取り組んでいくことが、家族を形成している意味であると考えられていました。そこに自らを捧げるか否かによって、家族の一員であるか否かを測られてきたように思います。同じ使命感に立って協力して課題に向かって行くのであれば、大きな力を発揮するでしょう。しかしそうでなければ、家族の間に分裂や対立を引き起こす契機が、常に含まれていたと言わなければなりません。これは、わたしの父の家庭だけのことではなかったでしょう。かつての聖職の家庭には、多かれ少なかれ、このような問題で悩みを抱える家族がいたでしょう。

このような体験をしてきますと、イエスさまが剣をもたらすとか、家族のものが敵となるとか仰ることを、決して他人事とか自分には無関係のこととして聞き流すことはできません。ある種の痛みを伴って聞かざるを得ないのです。

イエスさまに従うということが、家族の間に分裂や対立を引き起こす要因になるとすれば、心の内に複雑な思いや迷いが生じてきても、決しておかしいことではありません。これは 聖職の家庭だけの問題ではなく、日本の社会の中でクリスチャンとして生きて行くとするのであれば、形は違っても誰もが直面する問題です。

実際、皆さん中にもおられるでしょうが、家族の中で自分一人だけが信徒である場合には、信仰を生き抜くことは決してたやすい道ではありません。家族との関係を大事にしたいという理由で、教会生活を離れて行ってしまった方々も少なくはないのです。「剣をもたらすために来た」というみ言葉を、「わたしを取るか家族を取るか」、とイエスさまが迫ってくるみ言葉として受け止めるならば、苦悩の選択を強いられることにならざるを得ません。

このような、あれかこれかの選択をマタイの教会の信徒たちもしなければなりません。教会は初期の時代から現代に至るまで、いつもこの同じ悩みを抱えて信仰生活を送ってきました。そしてその同じ悩みに、わたしたちもまた連なっているのです。

そしてこの悩みは、具体的な問題として、今日においてもわたしたちの前に立ち現れてきます。

たとえばお墓の問題があります。家族の中で一人だけ信徒であるような場合、長いこと教会生活を送っていても、いざ葬儀になって、そのお家のお墓がお寺さんにあつたりすると難しい問題に直面することが起こります。お寺によっては、自分のところで葬儀をしなけ

れば、そこのお墓に入れてもらえなかったり、戒名をつけなければだめだというケースもあるようです。

仏教の葬儀は受戒の儀式、つまり戒名をつける儀式だということです。戒名というのは仏の弟子になる証としてつけられる名前です。これは、ある情報紙にお寺のお坊さんが書いていたことです。そうであれば、戒名をつけることを、形だけのことと割り切るわけにはいきません。

最近では、死んでからも夫と同じ墓に入るのはいやだという妻もいるそうですが、そんなことを言える家ならば、自分の信仰や信念に従って葬儀もしてもらえるでしょう。しかし、そんなことを言える女性は、特にご年配の方は、まだまだ多くはないでしょう。そして何よりも愛する家族とともに葬られたいと望むのであれば、自分の信仰をそこで曲げるのか、それとも家族とは別の道を選ぶのか問われざるを得ないのです。

アッシジの聖フランチェスコのように、『『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい』というみ言葉を示され(マタイ10:7~13)、主イエスさまに従う道へと導かれて、父親も財産も友もすべてを捨てて、小さな兄弟たちとともに托鉢し、修道・宣教に生涯を捧げることができれば、どんなに幸せかしれません。

しかし、このような道を歩むことが出来るのは、選ばれたごく僅かな人々だけではないでしょうか。それができずに、最後には仏の弟子として葬られなければならないというのでは、余りにも悲しいし、悩みは深いものがあると言わねばなりません。

ではどうしたら良いのでしょうか。残念ながらすべてが上手く収まるような解決方法は見当たりません。万事に納得できるような解決手段は見つからないのです。それではイエスさまの弟子たることを諦めるのでしょうか。簡単には諦めるわけにはいかないし、諦めてほしくはありません。

家族みんなが納得できる解決の仕方がなくて、自分もイエスさまに従うことを諦めきれないとすれば、わたしたちには何が出来るのでしょうか。今日のみ言葉を前にして、わたしたちに出来ることは、悩み続けることだけです。それが、わたしたちに与えられた十字架です。その十字架を担ってイエスさまに従うほかないのです。それがイエスさまの招きに応える道です。

主イエスさまのもたらした剣は、わたしたちの曖昧な信仰の態度を断罪し、切り捨てるための剣ではありません。その剣は、主イエスさまご自身に対して向けられたものでした。

イエスさまはわたしたちの悩みや痛みをご存じない方ではありません。ご自身がわたしたちの苦悩のために、その剣で傷ついてくださった方なのです。

「わたしよりも父や母を、息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない、わたしの弟子と呼ばれる資格はない」と言って切り捨てるのではなく、ご自身が代わってその刃を受けてくださったのです。イエスさまは、十字架の痛みの中から、信仰が弱いために悩んでいるわたしたちに向かって、「悩み続けなさい、まだ悩み続けて良いよ」と言ってくださっておられます。そのみ声を聞きながら、わたしたちは安心して、信頼をもって悩むことが赦されているのです。

今日は、わたしたちがイエスさまに励まされて、自分の十字架を負って歩み続けることができるように祈り求めたいと思います。